会議議事録

|  |  |
| --- | --- |
| 事業名 | 令和3年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」（２）教職員の資質能力向上の推進①効果的な教育成果②教職員研修プログラムの構築 |
| 代表校 | 一般社団法人全国専門学校教育研究会 |

|  |  |
| --- | --- |
| 会議名 | 第1回教員研修プログラム開発委員会 |
| 開催日時 | 令和3年7月13日（火）　10時00分～12時00分 |
| 場所 | オンライン開催 |
| 出席者 | 事業責任者：高岡　信吾 委　　　員：上里　政光、岡村　慎一、猪俣　昇、植上　一希　計5名　　　　　　　　請負業者：飯塚　正成　　　　　　　　　　　　　　　　　　　計1名　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合計6名 |
| 議題等 | 1. 事業リーダー挨拶（上里）

・本プログラムが2年目を迎えることが出来た。昨年度はコロナ禍もあり思うように進まなかったが、今年度は昨年度実施した調査を元にプロトタイプ型のプログラム開発、実証まで進めることになるので、順調に進行できるように皆さまのお力を借りていきたい。1. 学習評価WG今年度の取組予定・到達目標（植上）

・昨年度は基本的な情報を得ることを目的に調査を実施してきたが、今年度からは協力校への調査を実施し、非認知能力の評価に焦点を当て、評価基準作成のための「手引き」と「研修プログラム」を開発し、本格的に成果を達成していきたい。・計画としては、7月から12月にかけて複数回のWGならびに調査の実施、12月までに　「手引き」と「研修プログラム」のプロトタイプを作成し、12月から1月にかけて研修会を実施し、再検討を行い、1月中にプロトタイプを完成させたいと考えている。・現在、4－6月において実施した研究者ミーティングにおいて、「手引き」案の作成中。研修については、「手引き」の中から、より重要度の高いかつ研修に向いている部分をピックアップしてプログラムを作成し、研修では、グループワークなどの活用を予定している。そのプログラムも、調査を通して開発する。・「手引き」はテキスト形式を考えている。この手引きで研修を受けなくてもある程度の知識が得られ、研修を実施することでさらに高い効果が得られると見込んでいる。・「手引き」は5章構成で進めており、専門学校の教員の他、教育課程責任者・経営者等を考えている。1章は全員。2・3章は、教育課程責任者・経営者。4・5章は教員対象となっている。1章は品認知能力の重要性についての導入のような章としている。2章は、非認知能力の言語化を通して人材像を具体化することの有効性などモデルケースを示したりすることで進めていく。3章は、教育課程編成にあたり、非認知能力に着目し、より丁寧に検討・設定していく必要性について落とし込んでいく。4章は到達目標の設定、5章は評価という分け方をしている。どちらもケース紹介をしながら理解を深めることが目的。・具体的にはWGで精査していき、手引きを元に研修プログラムを開発する予定。【意見等】・科目ごとのシラバスを作成するということか。（高岡）　→シラバスは各教員が担当する授業ごと、コマシラバスが何月何日の授業、教育課程が学科全体のカリキュラムをイメージしている。（植上）　→今あるシラバスに非認知能力を追加していく感じか。(高岡)　→理想としては、目指す人材像がカリキュラム、シラバス、コマシラバスで一致していると良いが、まずは非認知能力を意識してもらうことができれば良いと考えている。「はじめに」と1章で、非認知能力について事例を用いながら具体的に落とし込んでいきたい。（植上）・科目での評価というよりも学科や学習習慣の中での非認知能力の育成度が学習成果なのかなと考えるので、自身で成長を感じられる定義が必要かと思うが、各学校で言語のイメージが違うケースもあるので難しいと考える。（岡村）　→研究者レベルでも課題であり議論したが、まずは全体的なことを総合的に作成することを目標とした。一方で研修をする際にピックアップの仕方を工夫するという意見が上がった。評価も細かい点数化的なものではなく、ミニッツペーパーのようなものを利用して生徒と教員が向上度合いを共有するというレベルを考えている。（植上）　→科目評価に繋げると非常に難しいし目的ではないが、授業では非認知能力を意識した学習攻略を提示していくことが必要だという視点で話ができると良い。（岡村）・当学園としては非認知能力の部分は評価ではなく人間性を高めていくことを目標としているので科目での評価ではなく、総合的な評価ができることが大切だと感じる。また、生徒と教員の認識に違いがあると教育に影響が出るため、言語や目標について生徒と教員で共有することが大切。この手引きとプログラムで教員にどこまでその意義を落とし込めて行けるかが重要だと考える。（上里）　→非認知能力は授業ではなく課外活動等も含めて身に付いていくものなので、評価を考えると現場の教員だけではなく、より上の階層の方たちに向けた項目が必要だと考えた。（植上）1. ICT活用研修WG今年度の取組予定・到達目標（猪俣）

・今年度の目的は、アダプティブラーニング教授法に関するプロトタイプ版の開発、そしてその研修を実施し実証していくこととなる。・授業デザインにデジタルコンテンツを導入し、ICTツールを活用して学習支援を行うことができる教員を育成する。・スケジュールとしては、WGの開催に合わせて9項目を設定している。・第1回WG…成果物の概要について、方向性の確認。・第2回WG…WGまでに昨年度の調査を踏まえ今年度どのような調査をするのか設計する。・9月～10月…2校対象に深堀調査実施。・10月…深堀調査の報告書作成。・10月～11月…調査を元に実証講座開発に着手、プロトタイプ作成。・12月…実証講座実施。・1月～…結果のとりまとめ、成果報告書の作成。・深堀調査の目的は2つあり、1つは多様な学びに対して教員が自ら生徒に問いかけをし、学生が自ら気付くことが大切であること、2つ目は、学生へのアプローチの考え方・内容・タイミング等を研修講師からの問いかけを通じて教員自らが考え言語化する、という題材として2本のケーススタディを用意する。ケーススタディの候補はデジタルハリウッド大学大学院と山野美容芸術短期大学を考えているが、専門学校を入れたほうが良いか検討したい。調査はインタビュー形式を考えている。・実証講座は12月に東京と新潟での対面式を予定している。・実証講座のプロトタイプ概要としては、①授業デザイン、②ICTツールを活用した学生と教員のコミュニケーション方法、③ICTツールを活用した学生同士、学生と教員のピアラーニング方法、④学習計画作り、コーチング、⑤アセスメントを考えている。【確認事項】(1)事前調査対象校・昨年度のデジタルハリウッド大学の教員のスタンスを見て、専門学校の教員のスタンスとの差を感じた。大学のスタンスは理想ではあるが、専門学校に適しているのかが疑問であり、学習に遅れている学生を、ICTツールを活用して新たな方法としてどのように引っ張っていくかが必要ではないかと感じる。（高岡）→ICTツールを活用した先進的な例としてデジタルハリウッド大学のノウハウを生かしたほうが良いと伝えているが、専門学校・大学・短大の質の違いを含めてどのように盛り込んでいくのかが重要だと考える。ICTツールだけを活用するのではなく、教員がどのように学生に介在していくのか、どういう関係性を持てるかが必要になるので、今後協議をしてもらいたい。（上里）→学習に遅れている学生を取り残さないというのが専門学校の強みであり、その個別サポートをどのように今回のテーマに入れるのか、調査対象2校からその点を事例として引き出せるのであれば、調査対象の学校種別は専門学校に拘らなくても良い。（岡村）(2)報告書作成時の項目について・今年度報告書作成は予定されていないので、手引き、研修プログラムなどを作成するにあたってどのような調査をした、という報告内容が有れば良い。（飯塚）(3)研修のカリキュラム・シラバスの方向性・研修プログラムは、アダプティブラーニングということで個別の学習最適化をしていくためにどのようにICTを活用していくか、先ほどの個別という課題に対してのアプローチとして、ティーチングだけでは一方通行になりがちだが、ICTを使用しコミュニケーションをとることで、今の学生には効果的な“対面ではない”コーチング方法もあるということを提案するというような、「能力レベルとメンタリティ双方向、個別の学習状況のとらえ方の視点でICTをどう活用するかの提案」という絞り込みでアウトラインを作っていけると良いと考える。能力育成をするために手順分析をしながらショートショートで積み重ねたほうが、学習効果が図りやすく、学習者のやる気に繋がる。ICTを活用したコーチング方法をプログラムとして構成すると能力の部分と心理的な部分にアプローチしていけるのではないか。技能習得をする上で、技能を構造化することで学習ステップを手順化、学習進度の差への対応として動画などオンデマンドを活用し、プラス学生に問いかけなどのコメント、コーチングやコミュニケーションのツールとして、こんなふうにICTを活用することができるというようなやり方かなと考える。（岡村）・学生の理解力に合わせて自分のペースで学習できる環境が必要。今後、学生の多様性に対応するためにICTを活用して環境づくりが出来るようになると良い。（上里）1. スケジュール（飯塚）

・次回は各WGの進捗を見ながら10月頃対面開催を予定。 |
| 配布資料 | ・令和3年度事業計画書・2021年度学習評価WGの事業計画　・手引き・20210713\_ICT活用WG資料 |

以上